PhotoReport & Interview

高校生たちの特別な夏。

- 宮崎県高等学校特別スポーツ大会 2020 -

新型コロナウイルスの影響で中止になった宮崎県高等学校総合体育大会（県高校総体）と全国高等学校野球選手権大会宮崎県予選（夏の甲子園予選）に代わり、これまでの部活動の成果を発揮する場として「宮崎県高等学校特別スポーツ大会2020」が開催されました。

新たな舞台で輝く高校生たちの「特別な夏」を、3年生を中心に、写真とインタビューでお届けします。

野球部の新しい歴史をつくれた 来年は歴史を塗り替えてほしい

BASEBALL

小林秀峰高校３年
野球部
主将　上別府（かみべつぷ） 晃希（こうき） さん

「本気で甲子園を目指していたので、気持ちの切り替えがうまくできませんでした」。

夏の甲子園予選が中止と知ったときの気持ちを、小林秀峰高校野球部キャプテンの上別府晃希さんはそう振り返ります。

甲子園予選に代わり、特別スポーツ大会（県高等学校野球大会２０２０）の開催が発表された時も、「うれしかったが、正直な気持ちは甲子園を目指したかった」と当時の気持ちを話します。しかし、キャプテンとしてチームをまとめるという責任感が、上別府さんの背中を押しました。

「下を向いていたらみんなの気持ちが下がってしまう。上を向いてみんなを引っ張っていこうと思いました」。

これまでの大会で私立高校に敗れて苦汁をなめてきたチームは、「打倒私立」を合言葉に。

秀峰高校の甲子園予選の最高成績だった2回戦進出という成績を塗り替え、「秀峰野球部の歴史を変えたい」と、練習に取り組みました。

7月12日に都城西高校、7月20日には小林高校との小林勢対決を制して3回戦に駒を進めた秀峰高校。3回戦では聖心ウルスラ学園に惜しくも敗れましたが、「全力を出し切って負けたので悔いはない」と上別府さん。

「今年は3回戦まで進んで、野球部の新しい歴史をつくれた。来年はもっと上に行って歴史を塗り替えてほしい」と後輩たちに想いを託します。

これまで支えてくれた両親に対しては、「いろいろ言い合いをすることもあったけど、アドバイスをもらったり、相談に乗ってもらったことで辛いことも乗り越えてこれました」、「努力してきたことを親は見ていてくれました」と感謝の気持ちを話す上別府さん。高校卒業後は就職して、「自立して、これまで迷惑をかけてきた両親に恩返ししていきたい」と話します。

野球は小学3年生から続けてきましたが、「本気の野球は高校まで」と気持ちを切り替える上別府さん。社会人として働きながら、草野球などで野球を続けていきたいと将来の夢を語りました。

HANDBALL

小林秀峰高校３年
男子ハンドボール部
主将　簗瀬（やなせ） 航（こう） さん

３年間下宿生活をさせてくれて、支えてくれてありがとう

小林秀峰高校男子ハンドボール部キャプテンの簗瀬（やなせ）航（こう）さん。中学時代に、全国優勝を目指すハンドボール部に憧れ、秀峰高校へ進学しました。

今年は新型コロナウイルスの影響で、全国高等学校ハンドボール選抜大会、県高校総体、国民体育大会九州ブロック大会が続けざまに中止に。目標が次々にかわり、目標とする大会も開催されるか分からない日々が続き、チームのモチベーションは下がり続けていました。

「後輩たちには来年がある。このままでは後輩たちにいいものが残せない」と気持ちを切り替えたチーム。これまで「お互いにぶつかり指摘しあってきた声掛け」を、「楽しみながら褒め合う声掛け」に変えて練習に取り組みました。

特別スポーツ大会（県高体連ハンドボール専門部R２大会）には「高校生活をハンドボールに捧げてきた。失点0を目指し、点を重ねて、格の違いを見せつける」という想いで臨んだ簗瀬さん。チームは圧倒的な強さを見せ、見事優勝を果たしました。

通常よりも短い試合時間、応援も禁止、ハイタッチも極力避ける必要がある、いつもと違う大会でしたが、「厳しい状況の中、いろいろな人のおかげで大会が実現してありがたかった」と簗瀬さんは話します。

「後輩たちに自分たちが全国で戦うかっこいい姿を見せたかったが、高校総体が中止になって見せられなかったのが残念。でも努力してきた日々は充実していました」とこれまでの日々を振り返り、「後輩たちには来年の高校総体で優勝してほしい」と夢を託します。

現在、市内で下宿生活を送っている簗瀬さん。実家を離れての生活が続くと、「久しぶりに帰省したときのお母さんの料理がおいしい」と笑顔を見せます。

いつも試合を見に来てくれる両親が「今日はよかった」、「いいプレーがあったね」、「優勝おめでとう」と褒めてくれるのが、モチベーションアップにつながっていたと話す簗瀬さん。

苦労を掛けた両親には、「３年間下宿生活をさせてくれて、支えてくれてありがとう」と感謝の想いを話しました。

大変な時期が続くと思うけど、折れずに笑顔でプレーしてほしい

小林西高校ソフトボール部キャプテンの成松（なりまつ）玲緒奈（れおな）さんは福岡県出身。ソフトボールのために小林西高に入学しました。

知り合いがほとんどいない土地での慣れない生活と毎日の部活。試合に負けて練習に身が入らなくなったほどの悔しい経験。人数が足りず試合ができなかった日々。今までの部活動生活を振り返り、「つらい時期のほうが長かった」と噛みしめるように話します。

しかし、1年生の途中からキャプテンを務めてきた成松さんは、グラウンドでは常に笑顔を心がけてきました。

「キャプテンとしてどんなときも笑顔でプレーすることが、チームのためにできることだと思いました」。

今年4月には1年生8人を新メンバーに加えたチームでしたが、新型コロナウイルスの感染拡大で県高校総体が中止に。

「わざわざ福岡から来たのに、いままでソフトを続けてきた意味があったのかなという気持ちでした」。

特別スポーツ大会（県高等学校春季ソフトボール選手権大会）の開催が決まった後も、気持ちが折れてなかなか立ち直れなかったという成松さん。お世話になってきたトレーニングコーチから「今までがんばってきたんだから最後までがんばれ」と声をかけてもらって、ようやく気持ちを切り替えることができました。

休校の影響で新チームで練習できたのは短期間でしたが、団結して大会に臨むことができたと話す成松さん。チーム12人そろっての最初で最後の大会は、「とにかく楽しむ」ことを意識してプレーしました。

1年生のころからいつも大会に応援に来てくれていた家族が大会当日も応援に駆けつけてくれ、「その応援に応えたかった」と成松さん。チームは準々決勝で敗れてしまいましたが、「やりきった」と大会を振り返ります。

仲間たちは「いつも明るい。1年生が入ってきてくれて特に明るくなった」と話す成松さん。

「新型コロナウイルスの影響などもあり、これから大変な時期が続くと思うけど、折れずに全員で笑顔でプレーしてほしい」と後輩たちにエールを送ります。

SOFTBALL

小林西高校３年
ソフトボール部
主将　成松（なりまつ） 玲緒奈（れおな） さん

来年は団体の部と個人の部どちらも上位入賞を目指したい

「今まで大会で良い成績を残したことがなかったので、すごく嬉しかったです」。

そう話すのは、小林西高校2年の鶴野（ひばりの）美佳（はるか）さん。

県高校総体の代替大会として、7月12日に早水公園体育文化センター弓道場（都城市）で開催された特別スポーツ大会（県高体連R2大会弓道競技（県西地区大会））の個人の部で準優勝を果たしました。

県高校総体の中止が発表され、「高校総体に向けて練習してきたので悔しかった」と鶴野さん。

代替大会として県西地区大会が開催されることとなり、「練習の成果を出せる機会ができて安心しました」と話します。

今回の大会では、県内を4つのブロックに分けて開催。普段の大会より出場者が少なかったため、あまり緊張せずにリラックスした気持ちで弓を引こうと臨んだ鶴野さんでしたが、「競技中は当てないといけないという気持ちで緊張しました」とも話します。

3年生を含めて9人が活動し、学年を越えて仲が良い弓道部。当日は、「みんなで頑張ろう」という言葉とともに、部員全員でチョコレートを食べるという弓道部に伝わる恒例行事で、気持ちをひとつにして大会に臨みました。

袴に憧れて中学校から弓道を始めた鶴野さん。中学生の時にはスランプがあり、つらい時期もあったといいます。

「中学生のころは大会で良い結果が出せないといつも泣いていました。高校に入ってから精神的に強くなったと思います。泣かなくなって、次に向けてがんばろうという前向きな気持ちを持てるようになりました」。

高校に入学してからは、持前の真面目さでメキメキと実力をつけました。その成長には、顧問の先生も太鼓判を押します。

3年生が引退し、これからは部内で最上級生に。

「練習のときも、大会のときも、主将を支えてみんなをまとめられるようになりたいです。来年で最後なので、団体の部と個人の部のどちらも上位入賞を目指したい」と来年に向けた決意を語りました。

KYUDO

小林西高校２年
弓道部
鶴野（ひばりの） 美佳（はるか） さん

BASEBALL

「私たちのために勝つ」と言ってくれただから力の限り応援しようと思いました

小林高校3年 野球部マネージャー 新竹佑香さん × 小池梨乃さん

（左から小池さん、新竹さん）

「2人のために勝つ」後輩たちが誓った恩返し

県内の高校で唯一3年生選手がいない小林高校野球部。3年生の新竹佑香さんと小池梨乃さんは、マネージャーとして1・2年生を献身的に支えてきました。

新型コロナウイルスの影響で夏の甲子園予選が中止になり、「選手たちと毎日がんばってきたのに、成果を発揮する機会がなくなり悲しかった。こんなにあっけなく終わるんだなと思いました」と小池さんは当時の心境を話します。

代替大会として特別スポーツ大会（県高等学校野球大会2020）が開催されることが決まると、「1・2年生が私たちのために勝つと言ってくれた。だから力の限り応援しようと思いました」と新竹さん。選手たちは、いつも笑顔で支えてくれた先輩たちに恩返ししようと、2人のために大会で勝利することを誓いました。

チームは1回戦で本庄高校を破って2回戦に進出。2回戦では惜しくも小林秀峰高校に敗れましたが、秀峰高校を上回る9安打を記録し敢闘しました。

「試合が終わる前は泣くかな、後悔するかなと思っていたが、大会後はやりきった気持ちが大きかった」と話す新竹さん。一方の小池さんは「絶対に泣かないと思っていたが、結局泣いてしまった」と笑います。

後輩たちへの最後の激励 熱い夏を終えて

最後の夏を終えた今の心境を「練習で自由な時間が少なく大変に思うこともあったけど、今は物足りない。それだけ充実していたんだ思います」と新竹さん。小池さんは「これまで毎日一緒に練習してきた1・2年生に会えなくなると思うと寂しい」と話します。

後輩たちはみんな素直で一生懸命。心を開いて頼ってくれたことや、「こんなことができるようになりました」と成長したことを教えてくれることがうれしかったと話す2人。

来年こそは甲子園を目指せると信じ、新竹さんは「絶対に努力は報われる。みんななら達成できると思うので、甲子園出場を達成してほしい」、小池さんは「来年力を発揮できるように、冬の間に力を蓄えて。辛いこともあるだろうけど一人も欠けることなくがんばってほしい」と後輩たちの背中を押します。

1年生のころから支え合ってきたお互いの存在については、新竹さんは小池さんを「まわりが良く見えて冷静。自分はいつも空回りばかりなので尊敬する存在」、小池さんは新竹さんを「自分1人では絶対に続けてこれなかった。自分の支えになってくれる存在」だと話します。

楽しいときも苦しいときも一緒に乗り越えてきた2人。これからは戦いの舞台をグラウンドから机にかえ、大学進学を目指します。

コロナ禍の夏、高校生に見た希望

今も世界中で猛威を振るう新型コロナウイルスによって、私たちの生活は一変してしまいました。それは、高校総体や夏の甲子園といった、目標としてきた大会、憧れの舞台を奪われた高校生も例外ではありません。

これまで目指していた舞台が突然消えてしまった高校生たちの悔しさややるせなさは、私たちの想像以上のものであるかもしれません。

しかし、「宮崎県高等学校特別スポーツ大会」の取材を通じて見えたのは、そんな思いを乗り越え、それぞれの置かれた場所から真っ直ぐに前を見つめる、高校生たちのしなやかな強さとまぶしい姿でした。